2016 年 12 月 1 日

スポーツフォーラム 報告書

【概　　要】

主　　催 ： 神戸ウイングスタジアム株式会社

主　　管 ： ＮＰＯ法人ＳＣＩＸ

（特定非営利活動法人スポーツ・コミュニティ・アンド・インテリジェンス機構）

後　　援 ： 神戸市教育委員会
神戸市スポーツ教育協会
兵庫県ラグビー協会

開 催 日 時 ： 2016 年 11 月 27 日(日)15:30～17:00

場　　所 ： ノエビアスタジアム研修室

テ　ー　マ ：「RWC2019 神戸開催」を成功させるために、
今やらなければならないことは何かー。

講　　師 ： 岩渕健輔氏
日本ラグビーフットボール協会理事

参　加　者 ： 指導者　保護者等　約 90 名

趣　　旨 ：2015W 杯エディーJapan の“世紀の番狂わせ”や
2016 リオ五輪男子 7 人制日本代表の 4 位入賞を支えた岩渕氏が、
世界の舞台で導き出した成功への道を語る。

内　　容：

講師紹介の前に、SCIX 事務局・美齊津より、SCIX 理事長・平尾誠二が 10 月 20 日逝去した旨が伝えられました。平尾誠二の意志により 15 年前に SCIX 設立に至った経緯と想いが語られ、今後も理事長の遺志を受け継ぎ、ラグビーならびにスポーツ文化の発展に貢献すべく活動を続けるにあたり、ご支援、ご協力をいただきたいとの挨拶がありました。

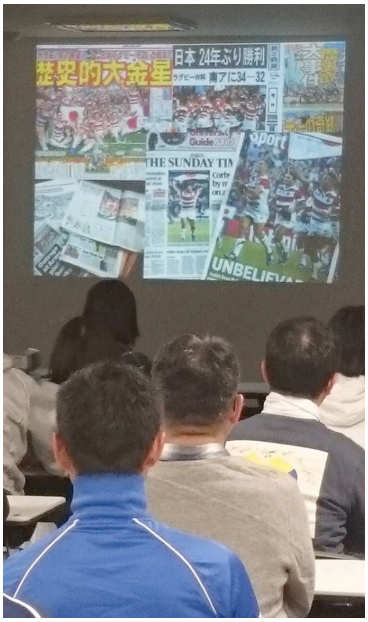
その後、美齊津から「平尾誠二亡き今、日本ラグビー界を牽引する人材」との紹介をうけ、講師の岩渕健輔氏が登場。昨年のラグビーW 杯はもとより、4 位入賞を果たしたリオ五輪 7 人制ラグビーにも日本代表スタッフとして帯同していた岩渕氏。日本代表が世界の大舞台で勝利するまでに至った軌跡について語っていただきました。

「JAPAN WAY 変えることが難しいことを変える」と題した画面がスクリーンに映し出され、画像などを見ながら話は展開していきました。

今や、ラグビーW 杯というと、昨年の南アフリカ戦の大金星を想起するでしょうが、それまでのラグビーW 杯での日本代表といえば、1995 年の 145-7 という歴史的大敗を喫したニュージーランド戦を思い浮かべる人が多く、実際、昨年の W 杯までは 1 度しか勝利したことがなかったと、日本ラグビーの過去と現在について語られました。

W 杯で一度しか勝利したことのないチーム、そんな歴史的大敗を喫したチームが、一体どのようにして南アフリカに勝利するまでに成長したのか？

「2019 年 W 杯日本開催、2020 年東京オリンピック開催と世界的大会が 2 年連続日本で開催されることはまたとない機会。なんとかして日本代表を強くしなければ！」と協会が代表強化に本腰を入れ、2012 年、岩渕氏が日本代表チームの GM に就任。まず行ったことが「目標設定」。15 人制においては W 杯ベスト 8、7 人制はリオオリンピック出場。このような目標を掲げたものの、当時の日本代表のレベルからすればかなりハードルの高い目標設定。とはいえ、それを達成するために何をしたか？「まずは歴史を学んだ」と岩渕氏。過去の対戦、勝因、敗因、他チームの分析・・・。また、一方で、当時、ラグビー以外の野球や女子サッカーといった他競技が世界大会で結果を残すようになり、世界で活躍できる競技が国内で注目されるようになってきたことを実感。リスクを冒してでも日本のラグビーを変えることが必要と痛感したというお話がありました。



「変えることが難しいことを変える」ためには、「フィロソフィー（哲学)」と「メソッド（手法)」が大切。「組織のリーダーが目標をどこに据えるかで大きく変わる」。さらに、「ポイントは着眼点と発想の転換」、過去のルールや慣習にとらわれず、あらゆる点において変革をしていったと語りました。

たとえば、強豪チームと定期的に試合をしようにも、強豪チームは数年先までスケジュールが決まっていて、試合を組むのは無理だと思い込んでいたところを、ワールドラグビー協会を通さず直接交渉をするなど、決められた枠を壊す試みをしたというのも一つ。また、日本人選手が海外チームでプレーすることで選手としてのレベルアップも見込めるため、海外でプレーし易い環境を作るにあたり、日本人選手枠を作ってもらうよう海外チームに働きかけるなども一つ。さらに、日本は国内リーグの期間が諸外国よりも短く設定されているのを逆手にとって、その分代表の合宿期間を長くとり、強化を図るなど・・・様々な固定観念を覆す試みをしていったそうです。

また、代表選手に対しては基礎からの変革ということで筋トレから始めたんだそうです。日頃から自身のチームでも懸命に筋トレを行ってきている選手であっても、目指すべき明確な目標があり、意識が変わることで、これほどの変化があったと、代表合宿招集当時と 4 ヶ月後の選手の身体の画像が映し出されました。さらに、エディー・ジョーンズ監督のリクエストは多岐に渡り、スマホやタブレット端末で見られるプレイブックなども書籍化して選手達に戦術や対戦チームの分析結果などが共有できるようにしていたというお話もありました。そのプレイブックの冒頭には、「W 杯ベスト８に入ることで、子ども達に将来ラグビー日本代表としてプレーしたい！と思ってもらう、ということを目指してもらいたい」と、試合に勝つだけでなく、日本代表としての使命、理念といったメッセージも掲げられていたんだそうです。

あらゆる変革を遂げながらも、最も難しいのはマインドセットだったと岩渕氏は振り返りました。過去に大敗を喫し、W 杯で一度しか勝ったことの無いチームが世界の大舞台で本当に勝てるのか？そこで、2015 年 W 杯に向けて 4 年間かけて「日本代表とは何なのか？」「真のアイデンティティとは何なのか？」ということをチーム全員で突き詰めて行ったと言います。それが「日本代表の文化＝JAPAN WAY」。その試みの一つとして、試合前にパズルのピースをひとりひとつずつ持ち、試合に望む準備ができたものからピースを埋めていくということを始めたと、その映像とともに紹介がありました。また外国人選手も多いため、心をひとつにするために試合前に国歌斉唱の練習をしている場面の映像も流されました。

その後、2015W 杯での南ア戦の試合を決めた、あの名場面、リーチ・マイケルがスクラムを選択したシーンの映像が流され、ラグビーにおけるリーダーの役割と同時に、歴史的大金星の舞台裏についても語られました。

「この４年間やってきた準備やマインドセットなどについては今後の代表チームにも残していくと同時に、メンバーも一新するので自主性やリーダーシップも引き出しながら、2019W 杯、2020 東京五輪で結果を出したい。さらにその先も継続的に世界で結果を残せる仕組み作りをしていきたい。そのためには世界で活躍する指導者、スタッフの育成が必須」とラグビー界の未来について展望と見解を述べられました。

最後に「ラグビーは成人の男性にとっても女性にとっても、少年にとっても少女にとっても価値のあるスポーツである。・・・」というラグビー憲章の言葉が紹介されました。その言葉にもある、ラグビーの素晴らしさ、魅力を伝えていくことに今後も尽力し、将来、子ども達が公園で、ラグビーボールで遊ぶような光景が見られるようにしたい、と想いを語り、セミナーは締めくくられました。

以　　上